



Title	精神病院在院患者の退院動態ならびに退院後の医療の継続に影響を及ぼす社会的要因に関する研究
Author(s)	黒田, 研二
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/35747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【6】

氏名・（本籍）	黒 ^{くろ} 田 ^だ 研 ^{けん} 二 ^じ
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 7789 号
学位授与の日付	昭 和 62 年 5 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	精神病院在院患者の退院動態ならびに退院後の医療の継続に影響を及ぼす社会的要因に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 朝倉新太郎 (副査) 教 授 中川 米造 教 授 西村 健

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

大阪市の居住者で精神病院に在院している患者を5年間追跡して退院動態を調べ、在院期間によって年間退院率がどのように相違するかを明らかにすること、及び精神分裂病患者について退院の有無ならびに退院後の医療の継続の有無に影響する社会的要因を解明することを目的とした。

〔方法ならびに成績〕

1. 大阪市域からの入院が多い府下の10の精神病院において、大阪市の居住者で81年7月時点で在院していた患者全数2,458人を対象に、各病院を訪問しカルテからの転記と職員及び患者からの面接聴取により各種の患者特性ならびに受療上の特性を把握した。その後5年間毎年7月に病院を訪問し、対象患者の退院動態を調査した。また5年間に退院した患者について、86年7月時点の受療状況を調査した。これらの資料をもとに、在院期間別年間退院率を算出した。さらに分裂病患者の退院の有無、及び退院後の外来治療継続の有無に、社会的要因がいかに影響を及ぼしているかを検討した。

2. 対象患者の診断名別分布は、分裂病68%、器質精神病9%、精神薄弱7%、分裂病以外の非器質精神病7%、アルコール症・薬物依存4%であった。81年7月時点での在院期間は、1年以内17%、1～2年10%、2～5年19%、5年以上53%であった。生活保護受給者65%、市長が保護義務者の患者が25%であった。生活保護、市長同意入院が多いことは、大阪市からの入院の特徴を反映したものと考えられる。

3. 在院期間別年間退院率を算出すると、1年以内の患者では51%、1～2年30%、2～3年19%と減少し、6年をこえると10%以下となった。年間退院率は在院期間にほぼ反比例して減少する。在院期

間が10年以上の患者では、生存退院数を死亡数がうわまわっていた。生存退院率は、在院期間3年をこえると10%以下となった。

4. 在院期間1年以内の患者の退院率は、アルコール症・薬物依存では77%, 分裂病以外の非器質精神病62%, 分裂病42%, 器質精神病33%であった。器質精神病ではそのうち死亡退院が6割を占めていた。

5. 分裂病患者を81年7月時点で、在院期間2年以内と2年以上の2群に分け、それぞれについてその後の退院患者と在院継続患者の特性を比較した。検討した13の特性のうち有意差がみられた項目は、短期在院群では、退院の有無との関連の強い順に、外泊の有無、年齢、保護義務者、医療費支払区分、病院の位置、性の6因子であった。長期在院群では、病院の患者当り医師数、外泊の有無、年齢、入院前就業状況、入院回数の5因子であった。両群に共通して、外泊をしていない患者、高齢の患者で退院可能性が低かった。また、家族による支えがないこと、及び生活保護受給という要因によって、早期退院が阻害されていた。さらに、病院の地理的配置、あるいは患者当り医師数という医療供給側の要因が、退院の可能性に影響していると考えられた。

6. 調査期間5年間に退院した分裂病患者のうち、86年7月時点で外来治療を継続している患者と、受療状況不明の患者の特性を比較した。検討した15の特性のうち両群間に有意差がみられた項目は、外来治療継続の有無との関連の強い順に、病院の位置、住居の有無、保護義務者、病院の在院患者当り看護者数、在院期間、退院後の期間、外泊の有無の7因子であった。病院が遠隔地にある、住居あるいは家族の支えがないという社会的要因が、退院後の医療継続の阻害因子になっていると判断された。

[総括]

本研究で算出した在院期間別年間退院率については、これまでに報告がなかった。在院期間別退院率は、今後、精神病院の長期在院患者の社会復帰活動を評価するための一指標として利用価値があると考えられる。本研究により、精神病院長期在院患者の退院の可能性は著しく低いこと、分裂病患者の退院の可能性ならびに退院後の医療の継続には、病状以外にも社会的要因の影響が強いことが明らかとなった。特に医療供給側の要因によっても、退院の可能性や退院後の医療継続が影響をうけているという成績は注目に値する。今後の地域精神医療の実施において、患者の社会復帰や医療の継続を阻害する要因への対応が要請される。

論文の審査結果の要旨

本研究では大阪府下の10の精神病院の在院患者を5年間追跡して退院動態を明らかにし、在院期間別年間退院率を算出している。本研究の定義による在院期間別退院率はこれまで報告されておらず、今後精神病院の長期在院患者の社会復帰活動を評価する指標として意義が認められる。また、精神分裂病患者の退院、及び退院後の医療の継続に、病院の地理的配置、病院の医師数、家族による支えなどの社会的要因が関与していることを本研究は明らかにした。こうした研究成績は地域精神医療を発展させるう

えで重要な知見であり学位論文に価すると思う。